松永久秀　篇３

久秀の最後

長慶と義興が亡くなり、長慶の養子の義継が14歳の若さで三好家を継ぎ、久秀と三好三人衆（親族と有力家臣の三人）が補佐します。その後、久秀は、義継とともに将軍義輝を殺害した将軍殺しとされていますが、近年の研究で久秀は、殺害した現場にはおらず、奈良にいたことが分かっています。また実際の首謀者は、久秀の息子久通と義継だったようです。

久秀は、義継および三好三人衆と対立し、久秀は多聞城にこもります。三好三人衆は追い詰め、東大寺付近で陣を構えます。この時に久秀は、東大寺を放火したとされていますが、実際には三好三人衆の陣へ攻めたとき、兵火の火の粉が寺にかかり全焼しました。久秀による放火ではないようです。久秀は寺の全焼後に周辺の治安維持にあたり、後に寺の再興支援をした京都の僧に、お礼を伝える手紙を送ったことから、寺の全焼には責任を感じていたようです。久秀の勢力は、この争いで衰えますが、後ろ盾を得ます。当時、力をつけてきた織田信長です。久秀は、織田信長および将軍の足利義昭と同盟を結び、奈良の支配を回復させていきます。その後は、信長に家臣同然の扱いで各地へ戦をしにいっています。

そして、信長と義昭が対立したときは義昭側につきます。信長は久秀のこもる信貴山城を攻め、久秀は、降伏勧告を拒否し、茶釜を抱いて爆死したとされています。実際には、久秀は潔く切腹し、首は織田側に渡されたようです。

３回にわたり久秀についてみてきました。決して悪役な武将ではなく、戦国の世を上手に乗り越えようとした一人の武将であったのではないでしょうか。